

FOCUS

追いかける。大学生。

京都精華大
芸術研究科 博士課程

田中 翔子 さん

大学院生の日本画家

日本画家として活動する京都精華大芸術研究科・博士課程の田中翔子さん(23)。1月に行われた第19回松伯美術館花鳥画展で、見事大賞を受賞した。「自分の思いを力強く表したい」と語る田中さん。日本画と向き合う彼女に迫る。



真剣な眼差しで筆を動かす田中さん

私の日本画を追求

「コスモスの香りまで表現できた」。田中さんは大賞作品「En autonome (アンノトン)」をそう振り返る。縦1・9メートル、横1・3メートルの大作。美しいコスモスが発する独特の匂いを黄、赤、淡緑の色を塗り重ね表現している。「技法は荒いが、とにかく自分の感性を力強く出したかった」。コスモス畑の中で感じ取った「青っぽい香り」をそのまま出すために、何度も筆で点を打ち、色を削っては塗り直した。納得するまで描き続けた作品は「思いをそのまま表現できている」と評された。

高校まではデザインが専門だったが、京都精華大の日本画コースへ。未知の世界に不安を募らせていたとき、日本画の岩絵の具を持つ独特の色彩に魅せられた。膠(にかわ)と呼ばれる接着剤や岩石の粉末を使い、絵具を一から作るという過程も魅力的だった。「新しいことができることが希望が湧いてきた」と当時を振り返る。

「自分の感性を力強く」

しかし、次第にギャップに苦しむようになる。絵画は自分の思いを表出させるもの。クライアントの要求が第一のデザインにはそれができない。絵の具作りなどの作業は淡々とこなせても、筆を動かす課題を与えられると戸惑った。「木のデッサン一つとっても、周りは自分の心情を絵に表すことができる。その感覚が理解できなかった」。人気画家の作品を見てこんな絵が描きたいと教授に相談したが「作風をまねするにはその画家の感性や価値観まで把握しなくてはならない。その覚悟はあるのか」と一蹴された。



大賞作品「En autonome (アンノトン)」

転機が訪れたのは3年生のとき。自由課題で春の情景を描くことになった。モチーフを探しに外へ出ると、通学路の美しい桜並木と石畳が目に見え込んできた。「この風景の中に春の色を散りばめたい」。感覚的に湧いた思いそのままに、七色の岩絵具をキャンバスに躍らせた。自分の思いを初めて形にできた作品。「やっと田中さんらしい」

(聞き手 田中謙太郎)

FOCUSは

神戸大学ニュースネット委員会
同志社大学 PRESS 編集部
NEWS 立命通信社
関学新月通信社
大阪大学 POST 編集部

関西大学タイムス編集部
神戸女学院大学 K.C.Press 編集部
京都女子大学藤花通信編集部
京都大学 EXPRESS 編集部

の共同編集による週刊フリーペーパーです

UNN関西学生報道連盟

配信・発行 (C) UNN 関西学生報道連盟 (公式HP) <http://www.unn-news.com/>

共同編集室 〒532-0011 大阪市淀川区西中島 4-2-24 ダイニホンビル 4F

(TEL) 06-6307-1315 (FAX) 06-6829-6353 (MAIL) info@unn-news.com